

私の8月15日

理事長 森

勉

私は昭和22年生まれで昨年古希を迎えました。まさに団塊世代の申し子として戦後70年を脇目も振らず生きてきました。古来より「武士は畳の上で死ぬことを潔しとせず」と言われていますが、約40年間の陸上自衛官勤務を幸か不幸か生きて停年を迎えてしまいました。それもあつてか、退職後は毎年暑い暑い8月15日に妻と共に九段下駅からヨタヨタと歩いて靖國神社に参拝しています。

大東亜戦争は、わが国の長い歴史上初めて外国軍の占領・統治を許すという屈辱的・衝撃的な敗戦で終わりました。広島・長崎は原爆の投下で壊滅し、全国の主要都市は無差別絨毯爆撃で焦土と化し、国の内外で300万人を超える犠牲者を出し、戦後は600万人以上の邦人が着の身着のまま外地から帰還しました。

加えて連合国の占領政策によってわが国の歴史・伝統・文化・精神等、無形のものまでが否定されてしまいました。しかしながら現在のわが国は不死鳥のように蘇り、世界有数の「自由で豊かで安全で美しい国」となり、国民

はこの平和と繁栄を自らの成果として当然のことのように享受しています。

この奇跡とも言える戦後復興の陰には、家族を愛し故郷を愛し後に続く者を信じて戦塵に散っていった英霊、そして英霊の志を継いで悲惨な敗戦から立ち直り子孫により良い社会を残そうとし血の滲むような努力をした先人達が存在したことを忘れてはなりません。

先般、東海道新幹線の中で一人の暴漢が2人の女性を傷付け、助けようとした1人の男性を殺害するという悲惨な事件が起きました。私は現場に居た訳ではありませんが、結果から見ると命を失った男性の行為は勇氣ある尊いものであると思います。しかしながら世間の風評はいたずらに暴漢を刺激し事態を悪化させたとか、素手で凶器を持った暴漢に立ち向かうのは無謀だとか、死者の魂を鞭打つようなものでした。戦後70年とはこのようなものであったのかと暗澹たる思いになりました。社会の道徳が多少退廃しようとも、一朝有事には陸上自衛官は敵が如何に強大であっても、任務が如何に困難であっても、国家の威信と人間の尊厳を守るため命を賭して敢然と立ち向かってくれるものと確信しています。

英霊に感謝の誠を捧げ、そして陸上自衛官の荒ぶる魂に思い巡らすため、今年も暑い暑い8月15日に靖國神社へ参拝しようと思っています。